

令和8年度

海星高等学校入学試験問題

国 語

(100点 45分)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題は、10ページの解答番号 まであります。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - ① 受験番号欄: 受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
 - ② 名 前 欄: 名前を記入しなさい。
 - ③ 教 科 欄: 受験番号の下にある教科欄に該当する教科をマークしなさい。
(備考欄には何もマークしてはいけません。)
5. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。
例えば、解答番号 と表示のある問いに対して ③ と解答する場合は、次のように解答番号12の解答欄の ③ にマークしなさい。

解答 番号	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
12	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

6. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってよろしい。

1

別紙1を読んで次の各問いに答えなさい。

問1 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】中の二重傍線部a～eを漢字に直すとき、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。

解答番号 a 、b 、c 、d 、e

a タ_レ的 ① 単 ② 短 ③ 端 ④ 胆 ⑤ 担

b カ_ク大 ① 拡 ② 画 ③ 核 ④ 閣 ⑤ 覚

c ボ_ウ大 ① 房 ② 膨 ③ 棒 ④ 坊 ⑤ 防

d リ_{ヨウ}域 ① 両 ② 量 ③ 領 ④ 料 ⑤ 令

e コ_有 ① 呼 ② 故 ③ 個 ④ 古 ⑤ 固

問2 【文章Ⅱ】中のア、イに入る言葉として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。

※アには同じ言葉が入ります。 解答番号ア 、イ

① しかし ② さらに ③ だから ④ では ⑤ つまり

問3 傍線部1「必然」の対義語を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号

① 突然 ② 偶然 ③ 自然 ④ 当然 ⑤ 泰然

問 4 【文章Ⅱ】中の **A** に入る言葉として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 **9**

- ① 交友関係を広めるところ
- ② 経験を積むところ
- ③ 知識を得るところ
- ④ 川上へ向かうところ
- ⑤ ルールを身につけるところ

問 5 傍線部 2 「代表的なのが算数や数学です」とあるが、本文における「算数」と「数学」の違いを説明したものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 **10**

- ① 「算数」は基礎的な計算を主軸にしたもので、「数学」はより応用的な計算を主軸にしたものである。
- ② 「算数」は勉強の入口としての役割を担っており、「数学」は上の概念がないためその役割を担っていない。
- ③ 「算数」も「数学」も、複雑な計算をこなす必要があるが、「数学」の方が難易度はやや低いものとなっている。
- ④ 「算数」は計算を中心とした簡素なもので、「数学」は高度な概念操作が必要になる、より抽象的なものである。
- ⑤ どちらも大差はないが、「算数」をしっかりと理解した上で「数学」に取り組むという学習の順序が決まっている。

問 6 もし「横方向の勉強」のみを続けた場合、どのような事態になると考えられるか。本文の趣旨をふまえて、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 **11**

- ① 知識が抽象化された結果、実際に起きる事例に対応できなくなる。
- ② 思考力の高まりは助長されるが、知識が身につくことはなくなる。
- ③ 概念を理解できる者の数が減り、学び自体が少数派のためものになる。
- ④ 新しい発想が生み出されていくが、それを実現に結びつけられない。
- ⑤ 知識が増えていくが、それらを結びつけた新しい理解が生まれなくなる。

問7

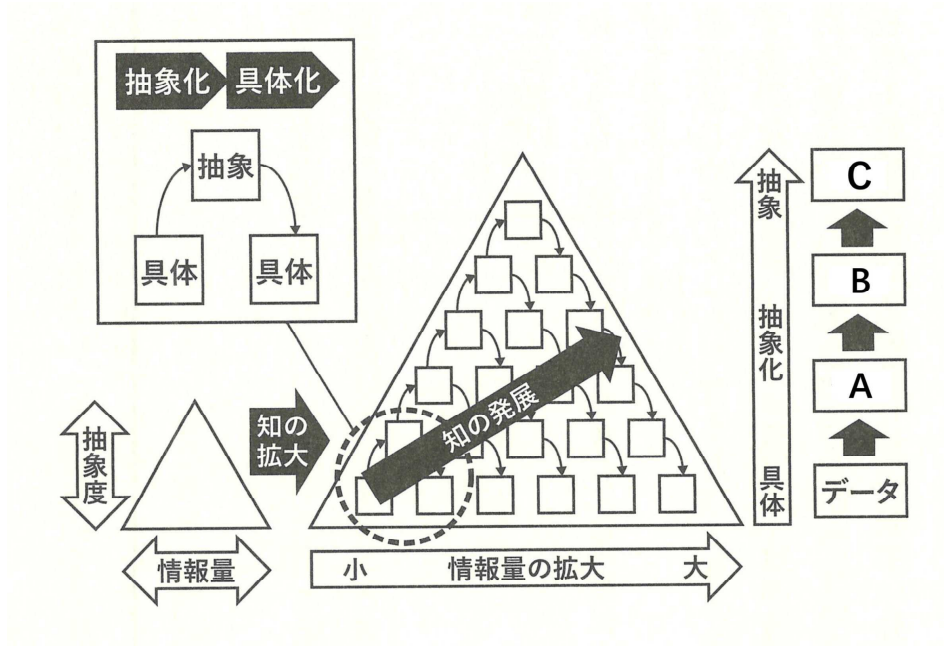
本文内容の説明として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号

12

- ① 具体的であることのデメリットは本文では書かれておらず、抽象よりも優れた概念だといえる。
- ② 理論は多くのものを説明できるほど完成度が高いとされているが、難易度が高く複雑なものになりがちだ。
- ③ 抽象的なものはシンプルで単純なものとなるため、抽象概念を操る力は多くの人々が有している。
- ④ 勉強では横方向のことばかり意識される傾向にあるため、漢字などの縦方向の勉強に注目するべきだ。
- ⑤ 具体的概念は理解しやすいものであるが、抽象を通じて縦方向の学びを進めることが勉強において大切だ。

問 8 次の図は「人間の知の発展のイメージ」という題のもので、A から C に入る適当な言葉を、【選択肢】①～⑤の中から一つずつ選びなさい。解答番号 A 、B 、C

【図】



【選択肢】

- ⑤ 価値観
- ④ 知識
- ③ 法則
- ② 意識
- ① 情報

問1 傍線部1「ちよつと立ちくらみがして、とごまかした」とあるが、その理由として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号 16

- ① 弱った祖父を心配するあまり、精神的に不安定になり起きた立ちくらみであるため、周囲に心配をかけたくないから。
- ② 講義の最中にその場にしゃがみこんでしまったので、授業担当の木谷先生に知られると良くないと思ったから。
- ③ 木谷先生になら、家の声が聞こえることで悩み続けていた自分の相談に乗ってもらえると嬉しい、気をひきたかったから。
- ④ 家の声は自分には聞こえないため誰にも信じてもらえない上に、声が聞こえること自体を否定されたくないから。
- ⑤ 家の声が聞こえるという事実が周囲に気づかれると、自分だけに話しかけている家の声が途絶えるかもしれないから。

問2 傍線部2「僕も、最初にあそこにはいったとき、たぶん同じような顔をした。なにかから呼ばれたような気がして」に使われている表現技法を次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号 17

- ① 擬人法
- ② 反復法
- ③ 対句法
- ④ 体言止め
- ⑤ 倒置法

問3 次の①～⑤の波線が引かれた言葉のうち、傍線部3「もちろん」と同じ品詞のものはどれか。一つ選びなさい。 解答番号 18

- ① 今日は天気が良いから、遠くの山がはつきり見える。
- ② あの図書館には、この世のあらゆる本があるのではないか。
- ③ 物置の整理をしていたら、きれいな絵画を見つけた。
- ④ 両親が出かけたため、午前中は家の中がとても静かだ。
- ⑤ 彼の美しい走りに、会場の誰もが釘付けになった。

問4 二重傍線部 a 「うわべ」 b 「ほがらかな」 c 「執着」の意味として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。

解答番号 a 19

b 20

c 21

a 「うわべ」 ① 表面上だけで ② 心の奥底で ③ よく思われないうで

④ 同情する気持ちで ⑤ 興味本位で

b 「ほがらかな」 ① 誠実な ② 正直な ③ 明朗な ④ 不器用な ⑤ 真剣な

c 「執着」 ① 所有権 ② 不快感 ③ 親しみ ④ 思い出 ⑤ こだわり

問5 本文における「声」についての説明として、適当でないものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号 22

- ① 「声」は幼少期から聞こえているが、僕に危害を加えるような恐ろしいものではないと知っていた。
- ② 「声」は子どもの頃の記憶と強く結びついており、両親が亡くなったことを思い出させるものである。
- ③ 台風の前までは、僕は「声」が自分だけではなく、母や周りの人にも聞こえていると思っていた。
- ④ 台風の夜に聞こえてきた苦しそうな「声」は僕を怖がらせたが、それは「家の声」だった。
- ⑤ 「声」は僕の行動や人格形成に大きな影響を与え、そのせいで僕は交友関係が狭かった。

問6 本文中の表現に関する説明として、適当でないものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 23

- ① 堅い言葉づかいではなく、分かりやすい表現を多用することで「僕」の心情を理解しやすくしている。
- ② 家の声が聞こえるという不思議な設定であるが、他の部分を現実的に書くことで違和感をなくしている。
- ③ 「僕」と「僕以外の人」を明確に区別するため、「僕以外の人」の発言がすべて「――」で表現されている。
- ④ 「ガタガタ」「みしみし」などの擬音語が使われており、台風における状況描写にリアリティーを与えている。
- ⑤ 「僕」の視点のみで描かれているため、繊細な「僕」の内面の描写がきめ細かなものとなっている。

問7 次の会話は、本文について生徒A～Fが話し合ったものである。本文と内容が一致するものを、以下の①～⑥の中から二つ選びなさい。解答番号 24、25

- ① 生徒A 「家の声が聞こえるなんて不思議な話だね。でも、『僕』はずっと困っていたみたいだし、家の声が聞こえて良かったことは何一つとしてなかったんじゃないかな。」
- ② 生徒B 「そうかなあ。家の声が聞こえることを母からも信じてもらえなかった『僕』にとって、信じてくれた木谷先生との出会いはとても大きなことだったと思うよ。」
- ③ 生徒C 「それに、声が聞こえることで家に対する親しみはより感じられると思う。実際、台風の日には苦しそうな声が聞こえて、風雨が弱まるまで家が頑張っていたことが分かったよね。」
- ④ 生徒D 「家の声に対して『僕』は【文章Ⅱ】でわざわざ人に問うようなものではないことだと思っていたけど、大学生になった【文章Ⅰ】では現実を知ったことで客観的な認識に変わっていて興味深いね。」
- ⑤ 生徒E 「これは疑問なんだけど、結局家の声は存在したのかな。『僕』以外の誰も聞いたことがないということから、子どもの精神的な不安定さからくる幻聴だったと思うな。」
- ⑥ 生徒F 「実際、『僕』は両親を亡くして以来、祖父のもとで厳しい教えを守ってきたことはすごく苦痛だったはず。伯父たちと同じように『僕』も祖父に興味をなくして当たり前だよ。」

問1 傍線部1「狂はしたうな」をすべてひらがな（現代かなづかい）に直したものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号 26

- ① きようはしとうな ② くるはしたうな ③ きようわしたうな
 ④ くるわしとうな ⑤ くるわしたうな

問2 傍線部2「法師計りぞ、物は申さぬ」の現代語訳として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号 27

- ① この私だけは、物を言わない
 ② この中の法師たちは、物を言わない
 ③ この中の法師たちは、はからずも発言してしまった
 ④ この私は、はからずも発言してしまった
 ⑤ 発言するのは、この中の法師ばかりだ

問3 本文中の「無言業」について説明した内容として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 28

- ① 「下座の僧」と「次の座の僧」が無言業を達成した。
 ② 「下座の僧」と「次の座の僧」と「第三座の僧」が無言業を達成した。
 ③ 「第三座の僧」と「上座の老僧」が無言業を達成した。
 ④ 「上座の老僧」のみが無言業を達成した。
 ⑤ 無言業を達成できた者はいなかった。

問4 傍線部3「この過」が指す内容として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号 29

- ① 自分の欠点というものは、なかなか自分では気づくことができないということ。
- ② 他人の欠点というものは、上手く隠されているため気づくことが難しいということ。
- ③ 自分の欠点を恥ずかしいと思うあまり、他人を攻撃してしまうということ。
- ④ 他人の行動をよく観察し、自己を写す鏡として認識した方が良いということ。
- ⑤ 自分の知らないうちに傷が出来ているように、欠点のない人間はいないということ。

問5 傍線部4「道業成せずと云ふことあらじ」が表す内容として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号 30

- ① 道業が成就することはないだろう。
- ② 上手くいけば道業が成就するだろう。
- ③ 道業を成就したい欲が邪魔になるだろう。
- ④ 道業を成就したいが必ずとは言えないだろう。
- ⑤ 道業は必ず成就するに違いない。

別紙1

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は同じ筆者が「具体と抽象」をテーマに記したものである。

【文章Ⅰ】

ここで改めて、知のピラミッドと表現した「^(注)具体⇓抽象ピラミッド」(実際にはピラミッドは四角錐^{すい}なので立体だが、断面を取って三角形とする)がなぜ三角形になるかを解説しておきます。
何気ない表現のように見えるかもしれませんが、これは単に感覚的に表現しているわけではなく、具体と抽象の関係を抽象化して^タタンの表現したものになっています。

川上から川下へという流れ

何らかのプロジェクトや仕事など、世の中の物事はあたかも川の流れのように川上から川下へと流れていきます。例えば建物の建築であれば、「全体構想から始まって、基本設計から詳細設計、そして施工から^(注)竣工」という流れがこれに相当し、情報システムの構築もまさにこれとほぼ同じで、「全体構想⇓基本設計⇓詳細設計⇓構築⇓カットオーバー」という形で川上から川下へと仕事は流れていきます。
この流れがまさに抽象から具体へという流れになり、ここに抽象から具体への流れが川の流れと同様に、「はじめは一人の構想から始まって、参加人数が基本設計⇨詳細設計⇨施工という形で増えていく量的な^{カク}大をたどっていく(川の流れも川上から川下に行くにしたがつて水量が増えていく)」という経過をたどります。

これが、「^(注)具体⇓抽象ピラミッド」が「末広がり」の三角形になっている理由の一つです。この考え方は、世の中の様々な事象の変化を考えるうえで非常に重要です。

(中略)

抽象化すればするほどシンプルになる

量的な話に加えて質的な面でも三角形である^(注)必然性があります。それは抽象度が上がれば上がるほど単純に表現されてくるからです。抽象レベルの公式では一つで表現されることが、応用レベルの具体になった^{ポウ}途端に^{カク}大な数の実例という形に変化します。

先に述べたような人類の知的能力の縦方向の進化とは、なるべく複数の事象を統一的に扱えるような共通法則の発見とも言い換えられます。理論の世界では、多くのものを説明できればできるほど理論としての完成度は高いこととなります。そして往々にしてそれはシンプルなものであることが多いのです。

したがって、「具体⇓複雑、抽象⇓単純」という関係性も、この三角形の形状が象徴していることとなります。

理解できる人の数の多寡^(注)

関与する人間は川上の抽象になればなるほど少なくなるのと同様に、抽象レベルが高い事象になればなるほど理解できる人の数も少なくなっていくます。

(中略)

計算中心の「算数」と高度な概念操作が必要となる「数学」との違いは、ごく単純に表現すれば抽象度の違いです。そして、学年が上がれば上がるほど抽象度が高くなるために行かれる人の数は減っていきます。こうした数学が縦の世界の学問の代表だとすれば、いわゆる「暗記系」の学問の代表である世界史や日本史(本当はそれだけでは決まてないのですが)や英単語等の勉強は、学年が上がるにつれて暗記すべき量は増えていくものの、基本的にやっていることの難易度が飛躍的に上がるわけではなく、その点で「ついでに行かなくなる人」は抽象度の高い学問に比べれば少なくなります。これも三角形になる理由の一つです。

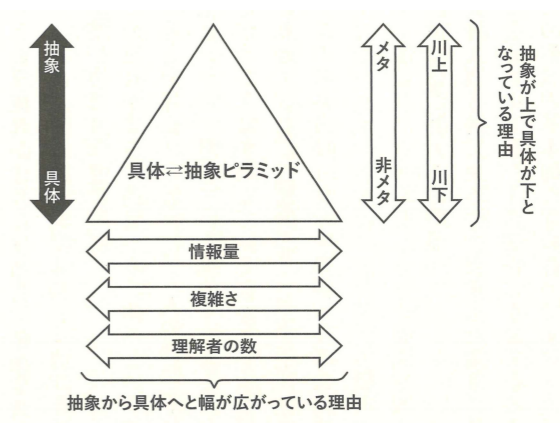
具体的にすればするほど理解できる人の数は増えていきます。したがって、多数派の人を相手にして「数を稼ぐ」必要がある政治や「マス」メディア(少数の^(注)ニッチではなく多数派の大衆を相手にするもの)や、^(注)ページビューを稼ぐ必要のあるネット広告や記事などは、とにかく「具体的でわかりやすく」することが求められます。

「具体派」の人はこのような川下側の価値観が全てだと信じているので、「抽象⇓わかりにくい⇓悪^(注)」というステレオタイプから抜け出すことができません。

実際には、世の中の仕組みを作ったり、多くの人が参加する仕組みの基本構想を作ったり、建築物のコンセプトを作ったりと、本書でいう「系」をスタートさせる人には抽象概念を操る力が必須になるのですが、このような人たちは社会の(特に抽象度が上がるほど「超」がつく)少数派になるために、こうした価値観が理解されにくいのです。

(細谷功『「具体⇓抽象」トレーニング 思考力が飛躍的にアップする29問』より 一部改)

- 注
- ・ 具体⇄抽象ピラミッド …… 筆者が定義した知の発展をモデル化したもの（下の図）。
 - ・ メタ（下の図内） …… 物事を一つ上の段階からみること。より抽象的な理解につながる。
 - ・ 竣工 …… 建築物や土木の工事が完了すること。
 - ・ カットオーバー …… 新しいシステムが稼働すること。
 - ・ 多寡 …… 多いことと少ないこと。
 - ・ ニッチ …… 隙間のこと。ここでは、大多数には受け入れられないものという意味。
 - ・ ページビュー …… ウェブページが表示された回数。
 - ・ ステレオタイプ …… 型にはまった考え方。



【文章Ⅱ】

（以下は『勉強によって直接得られるものは何か』と聞かれたら何と答えますか。』という質問に対する回答の文章である）

多くの人は「知識」と答えるのではないかと思います。また、学校も（友だちをつくったりスポーツをしたりといった活動を除いて、「学科」のリョウ域に絞れば）「A」といわれることも多いでしょう。

一方で、「勉強⇄知識」という認識には大きなものが一つ欠けています。

先にお話ししたのは、知識と思考からまた新しい知識が生まれることでどんどん賢くなっていくという公式でした。つまり勉強⇄知識という公式からは「考えること⇄思考」の要素が抜け落ちていきます。

料理の例にもどれば、料理をすることで得られるのは「料理そのもの」に加えて「料理の仕方」もあるということです。

これをここまでお話ししてきたこと、とくに具体と抽象のピラミッドの話と結びつけてみましょう。具体と抽象のピラミッドというのは、人間がこれまで賢くなってきた経緯と表裏一体の関係です。

一つの知識を抽象化してまた具体化すると新しい知識が生まれるという話から、「知識が増える」というのはピラミッドでいうと「横方向」（水平方向）が大きくなっていくことで、考えるというのは「縦方向」（垂直方向）の運動を行うことを示します。

「ア」、人間が賢くなってさまざまな知識や知恵を蓄えるためには「横方向」である知識の増強と、それを生み出すための思考、「ア」「縦方向」の増強が必要だったわけです。

これまでの勉強では、横方向のことは意識しても縦方向のことを意識することは少なかったかもしれませんが。横方向の知識を増やしていくというのは簡単にいえば「暗記」ものの勉強です。

たとえば漢字や英単語、あるいは歴史上の年代やコ有名詞の暗記というのがその代表といえるでしょう。

「イ」、縦方向はどういう勉強が相当するでしょうか。

代表的なのが算数や数学です。たとえば「数」というのは抽象化から生まれたものの代表でした。「5」というのは、ライオン5頭、こおろぎ5匹、トマト5個、椅子5脚をまとめて一つの概念としてあつかうことで、他のものすべてが5つあるという状態を表し、応用力を上げるためのものでした。

これは5という数字をあつかうことが、抽象化と具体化という上下方向の運動をあつかうことの訓練になっているのです。

また、数学の代名詞とも言える方程式で出てくるxやyといった記号や直線や三角形といった図形も、抽象概念の代表です。

数学は抽象概念をあつかうためのもので、ここでも主に抽象化や具体化という「上下運動」をつねに行う必要があります。

（細谷功『13歳から鍛える具体と抽象』より 一部改）

別紙2

大学院生の遠野守人は、幼い頃から「家の声」が聞こえるという不思議な力を持っている。【文章Ⅰ】は守人が小学三年生のとき、事故で両親を亡くした後の文章で、【文章Ⅱ】は、まだ音を「家の声」と認識していない小学校入学前年の文章である。

【文章Ⅰ】

それまでのおおらかな生活は一転した。僕はすぐに進学塾に入れられ、大学は経済学部に行って一流企業に就職しろ、と言われた。祖父にとって、僕はたったひとりの男の孫だった。長男のところは女しか生まれず、次男のところは子どもができなかった。

だが、そんな祖父も、僕が高二のときに祖母が亡くなると、急に弱ってしまった。経済学部に行く気がせず、文学部を志望したが、なにも言われなかった。

結局Y大学文学部に入学したが、とくにしたいことも見つからないまま一年が過ぎた。二年の前期、たまたま木谷先生の授業を受けた。授業のフィールドワークで町をめぐり、古い建物にはいったとき、なんとも説明しようのない落ち着いた気持ちになった。

そして、声が聞こえた。その声があまりにやさしく、あたたかかったので、胸がぎゅゅとしめつけられ、僕はその場にしゃがみこんでしまった。

ほかの学生から声をかけられ、講義中だったのだ、とはっとした。あわてて立ちあがり、ちよつと立ちくらみがして、とごまかした。

講義が終わって、木谷先生から声をかけられた。さっきの行動が変に見えたのかもしれない、と焦った。

——あの建物、よかつたでしょう？

木谷先生は少し微笑んで言った。僕はぼかんと先生の顔を見た。

——君、建物にはいったとき、ほうつとした顔したでしょ？ わかりますよ。僕も、最初にあそこにはいったとき、たぶん同じような顔をした。なにかから呼ばれたような気がして。

びくんとして、目を伏せた。

人には聞こえないものが聞こえることで、これまでもちよつとした不都合はあった。親戚の家に連れて行かれたときに妙に苦しそうな声が聞こえ、不安になって耳を塞いでしまったり、声の出る場所を探してきよるきよるしてしまったり。そのたびに、落ち着きがない、と祖父にひどく叱られた。

幻聴だとしたら、精神的な病気なのかもしれない。そう疑い、不安になった時期もある。だが、だれかに相談しようとは思わなかった。声の存在を否定されるのが怖かった。僕にとって、声は子ども時代の記憶につながる大事なものであった。

僕があまり友だちを作らなかつたのも声のせいだ。親しくなつたとして、僕にしか聞こえない声をどう説明したらいいのか。信じてくれる人がいるとは思えない。うわべ^aだけ信じたふりをされるのもいやだし、打ち明けたことで友だちが離れていくのも辛い。

隠し続けるしかない。でもそれもいつか苦しくなるだろう。それならいつそ、最初からだれとも親しくなるのはやめよう。そう思っていた。

——別になにかがほんとに聞こえたわけじゃ、ないんだけどね。でも、ときどきそんな気になる建物があるんだよ。

木谷先生は笑った。たぶん僕は、先生のほがらかな笑顔に救われたんだと思う。このときは気がつかなくつたけれど。張り詰めていた気持ち^bが少しゆるんで、この人のもとで学びたい、と感じた。

二年後の後期、専門ゼミ^註を選ぶとき、僕は木谷ゼミを希望した。無事認められ、木谷先生のもとで学ぶこととなった。

研究は楽しく、できれば研究者になりたいと思った。それが無理でも、研究にかかわる仕事につきたい。だから大学院に行きたかった。

だが、祖父にはもちろん³反対され、あきらめて就職活動をするつもりでいた。

ところが、僕が三年の夏に祖父が病に倒れ、余命半年という宣告を受けた。皆が就職活動をはじめたころ、僕は祖父の介護に追われた。四年にあがってまもなく、祖父は入院し、病院で息を引き取った。亡くなる一週間ほど前、祖父は、お前のやりたいようにやれ、少しだが貯金はある、と言った。そのあと意識を失い、もう戻ることはなかった。

葬儀や相続であわただしく、気づけば六月を過ぎていた。就職活動には完全に遅れを取っていた。そんなとき、木谷先生が大学院に来ないか、と誘ってくれた。

就職が決まらず^註ブランクができるより、大学院でつなぎ、来年就活してもいい、教員免許や学芸員免許を取る道もある、と言う。院試は夏で、出願にはまだ間に合った。もともと進学はしなかったし、祖父から渡されたお金もあつたから、思い切って院試を受け、大学院に進学したのだ。

祖父が入院してからそろそろ一年経つ。あのときから、僕はこの家にひとり暮らししてきた。伯父たちにはそれぞれ自分の家がある。彼らも祖父に対してあまりよい思い出がないのだろう。この家にもまったく^註執着がない。僕が出たらすぐに売却して、処分したいと思つていようだった。

注・ゼミ ……ゼミナールの略。少人数で研究を行う授業

・ブランク ……空白期間のこと。

・院試 ……大学院の入学試験のこと。

【文章Ⅱ】

家のなかにいると、ときどきその声が聞こえた。歌うようだったり、笑うようだったり、ささやくようだったり、寝息のようだったり、だが、なにを言っているのかまでは聞き取れない。それでも、お化けや妖怪のような怖いものでないことは感じ取っていた。

声は赤ん坊のころからいつも聞こえていて、僕にとって^註はあたりまえのものだった。だから、あるとき母にその声のことを訊ね、母にそれが聞こえていない、と気づいたときは、ひどく驚いた。

小学校にあがる前の年のことだ。父が不在の夜だった。その日は関東地方に大きな台風が来ていて、夕方から雨と風がどんどんひどくなっていた。窓ガラスがガタガタ鳴り、家がみしみしと軋んだ。

そのとき、声が苦しうにうめいた。これまで聞いたことのないような声で、僕は怖くなって母に声のことを訊ねた。

——なんの声？ なにも聞こえないわよ。

僕は驚いた。声が聞こえるのはみなが寝しずまったあとや、部屋にひとりでいるときが多かつたし、僕にとってはわざわざ人に問うようなものではなかつたから、それまで声のことを人に訊いたことがなかつたのだ。

——聞こえないの？ すごく苦しうなんだ。病気なのかもしれない。

病気、と口にしてから、はたと止まった。病気、というからは、その声の主がいることになる。それまで声はしても、それがなんの声

か、と考えたことはなかった。でも「音」ではなく「声」なのだ、とは思っていた。

——風の音じゃない？ 台風が来てるから、外はすごい風だものね。母にやさしく言われると、そうであるような気もした。ともかく母には聞こえないのだ。それ以上話してもらいがあかない。僕は口をつぐんだ。

声は夜遅くまで続いた。声がしているあいだ、なかなか眠れずいた。母が眠ってしまったから、闇のなかで目と耳を凝らしていた。

家はがたがた揺れ、みしみし軋んだ。そして、ずっと、声が苦しうなっていた。

(中略)

うちの屋根が、丸ごと庭に落ちていた。

母は、おじいちゃんを呼んでくる、と言って、出かけて行った。台風が去ったあとの妙に青い空の下で、僕は庭に落ちた屋根に乗って遊んでいた。

ほどなく、祖父がやってきた。昨日の台風の突風で、屋根が剥がれ、

そのまま落ちたのだろう、と言った。不思議なことに、二階にはそれほど被害はなかった。天井板が残っていたのと、屋根が落ちたのが風雨が弱まりはじめたころだったからだろう。

(ほしおさなえ『菓子屋横丁月光荘歌う家』より 一部改)

別紙3

ある山寺に四人の上人(優れた僧)がおり、修行のため道場に四人が並んで座り、七日間の無言業(無言を保つこと)で精神を鍛える修行)を始めた。本文はその後の場面である。 ※道場には承仕法師一人だけが出入りを許されている。

ここに、更闌^{こうた}け夜ふけて、灯の消えんとしけるを、下座^{げざ}の僧、「承仕、火かきあげよ」と云^いふを聞きて、

時間も経ち夜も更けて、

灯火が消えかかったのを見て、

灯心をかきあげなさい

次の座の僧、「無言の道場にして、物申す様候^{ようそう}はず」と云^いふ。第三座の僧、二人ともに物謂^いふ事不思議にお

物を申すのはいけません

ぼえて、「狂¹はしたうな」と云^いふ。上座^{じょうざ}の老僧、面々に様はかはれども、物云ふ事、あさましくもどかわし

世迷いことを申されるな

それぞれ言い方は変っても、

驚きあきれて嘆かわしい

く覚えて、「法師計²りぞ、物は申さぬ」と云^いひて、うちうなづきける。賢^{こと}げにて殊^{おこ}に嗚呼^{おほ}がましくぞおぼゆ

一人で頷いている。

その様子は一見賢そうに見えて、とてもばかばかしく思われる。

る。

この事を思ひ解^{こと}くに、人毎^{ひとごと}にこの過^{とが}遁^{のが}れ難^{がた}し。我が身の失^{とが}は知らず、人の失をば聞きて人を謗^{そし}る、常の心

どの人もみなこの過ちから逃れることは難しい。

誹謗(ひぼう)するのは、

なり。我が面^{おもて}の疵^{きず}の見えざるをば、鏡を見て知るが如^{ごと}し。されば心あらん人、三教^{(注)3}の鏡を以て、三業^{(注)3}の疵

自分の顔面の傷に、鏡を見て初めて気づくようなものである。

思慮のある人は、

三教の鏡に、三業の疵を照らすべきである。

を照らすべし。古人^{こじん}云はく、「終日^{ひねもす}に他人の失をむかへみる暇を以て、自ら失を見て慎^{つし}まば、道業^{(注)4}成せずと

「一日中他人のあら探しをする暇を、

自分の過ちを見て反省する時間にあてれば、

云ふ事あらじ」。

注・三教 …… 仏教・神道・儒教の三つをまとめた名称。

・三業 …… 身・口・意でなす全ての行為のこと。

・道業 …… 仏道の修行のこと。